現代音楽と「相声」とレイ・リャンさん

ジャーナリスト　戸張東夫

クリスマスから新年にかけてのホリデーシーズンを、米国カリフォルニア州のサンディエゴに住む娘夫婦のところで孫たちと一ヶ月ほど過ごすことになってから何年になるだろう。サンディエゴはカリフォルニアの最南端。南はメキシコ国境に接し、西側は太平洋に開けている。気候温暖、後期高齢者の筆者には住み心地がすこぶるよい。

女房と空港に着くと、娘がいつも家族用のミニバンで迎えに来る。今回も同じ光景だ。空港から娘の家までは約三十分。途中車中の会話の中で娘がこんなことを教えてくれた。「作曲家のレイ・リャンさんが目下新曲に取り組んでいる。これには『相声（シアンション）』を取り入れるといっている。」「そうか。リャンさんがまた新たな試みを始めたのだな。」と応じたものの、「相声」を取り入れるとは一体どういうことなのか想像できなかった。

「相声」は、わが国の落語や漫才によく似た中国の笑いの伝統話芸だ。それを現代音楽に取り込む。そんなことが出来るのか。「相声」は芸人の声で成り立っている。その音声をナレーションのように“組み込む”のだろうか。とにかく前代未聞の実験である。「相声」の魅力をわが国に伝えようと、畑違いにもかかわらず、紹介する本を一冊出版してしまったほどの極め付きの「相声」ファンである筆者としては見過ごせない問題である。

さいわいリャンさんとは面識もあるので、お会いして詳しく聴いてみよう。そうだ。思い出した。確か二年前だ。パーティーの席でリャンさんに初めてお眼にかかった時、筆者が「相声」ファンだと自己紹介したのだ。それを覚えていて、「相声」の音楽化について知らせてくれた。そういうことなのだろう。とすると音楽になった「相声」をきっと聴かせてもらえるだろう。面白いことになりそうだ。

2015年年末から翌年1月にかけてのサンディエゴの休日はこんなぐあいに幕を開けたのである。

＊　レイ・リャンはLei Liang。Lei（雷）は名前、Liang（梁）は姓。中国では梁雷だが、現地や音楽の世界ではLei Liangで通っている。

＊　「相声」を紹介した本というのは戸張東夫『中国のお笑い―伝統話芸“相声”の魅力』（大修館書店、2012年12月）のこと。

ピューリッツァー賞にノミネートされる

作曲家のリャンさんは、米カリフォルニア大学サンディエゴ校の教授で、音楽学部部長でもある。同校は現代音楽研究の最先端を行く機構として一目おかれている名門校だということは音楽の世界ではつとに知られている。わが国の桐朋学園大学音楽部とはかねて交流があり、昨年6月には同大学の作曲理論部会主催の公開講座に招かれ、“Toward an Austere Virtuosity（飾り気のない技巧に向かって）”と題する講演をしたり、その後愛知県立藝術大学の講座「多様式時代の方法論」にも参加している。学者タイプの作曲家といってよさそうだ。

2011年にローマ賞を授賞したほか、これに先立つ2009年にはアーロン・コープランド・アワードを授賞しているし、グッゲンハイム・フェローシップにも選ばれた。昨年はピューリッツァー賞音楽部門にノミネートされ、入賞は逸したものの最終選考に残るという快挙を成し遂げた。気鋭の作曲家である。

1972年11月中国天津生まれ。中国の改革開放世代といってよかろう。中国は1978年リャンさんが六歳のとき、鄧小平の主張する改革開放政策に転じ、毛沢東離れ、イデオロギー離れ、文化大

革命離れを進めた。中国の人々は1949年の中華人民共和国建国以来初めて政治やイデオロギーがらみの大衆運動から開放され、比較的自由で、落ち着いた生活を営むことが許されたのである。リャンさんは、この時期に由緒ある中国藝術研究院音楽研究所で中国の古典や伝統文化を学ぶことが出来た。文化大革命当時は伝統文化は破壊すべき“敵”であった。その意味でリャンさんは運がよかったといってよいだろう。

幸運に恵まれたとはいえリャンさんにはリャンさんなりに強い不満を抱いていた。中国の人たちが経済的豊かさを求めることに熱中し、伝統文化や歴史的文物をちっとも大切にしようとしないのである。伝統文化など古いものは反革命だという文化大革命当時の考え方の影響もまだ残っていたのである。それだけが不満だからというわけではないが、1989年の天安門事件を機にアメリカに渡り、遠く離れた異国の地で祖国の伝統文化に思いを馳せ、その保護と再生に尽力している。

リャンさんとちがって運の悪かったものもいる。

リャンさんは書生派、タン・トゥンは江湖派

たとえばリャンさんと同様アメリカを拠点に活動する中国人の作曲家タン・トゥン（譚盾）は1957年生まれの文革世代である。中国は1966年から76年にかけて十年間全土を巻き込む政治運動“文化大革命”に突入した。タン自身も2年間強制的に農業に従事させられたが、政府も、共産党も、公安（警察）も、軍隊までもが崩壊し、無法地帯と化した中国で何とか生き抜いてきたのである。アメリカに渡り作曲家としての地位を確立した今日でもおそらく口に出せない苦痛や心の闇を抱えているに違いない。タンが環境に自分を合わせ、与えられたものは拒まず、貪欲にがむしゃらに活路を開いてきた猛烈な生き方は、歌劇でも、交響曲でも、映画音楽でも何でも拒まず手がけるタンの作曲家としての“今”にも影を落としているといえないこともない。このような貪欲さはリャンさんには見られない。もちろんこの二人の資質そのものの違いもあったことはいうまでもあるまい。二人の違いを中国風にいうと、タンが江湖（チアンフゥ）（渡世）派（パイ）、これに対しリャンさんは書生派（シュウシェンパイ）ということになろうか。

それにしてもリャンさんとタンの生まれた時期はわずか十五年違うだけだ。それなのにそれぞれ生まれ育った環境がこれほど異なる影響を二人に与えたのは現代中国が政治的、社会的安定を実現できなかったことを物語っている。

タンは数年前、確か2011年7月サンディエゴに来たことがある。それでタンを思い出したのである。自作の映画音楽をライブで演奏する野外コンサートが当地で開かれたので、それに出演するためである。巨大なスクリーンに映画を映しながら、それをバックにオーケストラが映画音楽を演奏し、タン自身がタクトを振った。この日演奏されたのは武侠映画三部作『グリーンデスティニー』、『HERO』、『女帝（エンペラー）』の音樂だった。7月には珍しく肌寒い日だった。サンディエゴの夏はあのときが初めてなので、よく覚えている。

＊　武侠映画三部作の原題、監督、製作年は次のとおり。▼『グリーンデスティニー（臥虎蔵龍）』李安、2000年▼『HERO（英雄）』張藝謀、2002年▼『女帝（エンペラー）（夜宴）』馮小剛、2006年。

どこか日本的な『Bamboo Lights』

リャンさんに話を戻そう。

リャンさんのCDとして出版されている組曲『Bamboo Lights（竹の光）』（2013年）を聴いたことがある。格調のたかい美しい旋律だ。どこか日本的で親近感すら感じさせる。

リャンさんとは2010年以来親交がある作曲家で桐朋学園大学院大学の作曲理論担当、石島正博教授は「『Bamboo lights』はレイ・リャンの死生

観を表現しています」と専門家の視点から読み解いている。音楽は底というか奥が深い。石島教授はまた「リャンさんは単なるエクゾティシズム（または中国趣味）によって有名になった人々とは全く無縁の存在です。寧ろ、孤高といっても良いかも知れません。」と語っている。

＊『Lei Liang Bamboo Lights』N.Y.・Bridge Records Inc. 2014 年出版。

＊ 桐朋学園大学院大学は日本で初めての芸術系独立大学院。富山市にある。

さて早くリャンさんにお会いして「相声」のことを詳しく聴きたいという筆者に娘がこんなことを言う。「リャンさんも作曲に参加したチェンバーオペラの発表会を学内のホールで開くのでいらっしゃいと招待されている。リャンさんも来るに違いない。」そこで娘と一緒に会場に赴いた。

オペラは始まっていた。ステージの上に女性が一人立ってバラードを歌っている。人身売買組織によってメキシコからカリフォルニアに連れてこられ、売春婦にされた女性の悲劇を訴えている。実際に起こった事件を題材にしているという。舞台後方で三人がギター、ピアノ、パーカッションを伴奏している。「相声」もこんな風に取り上げるのかもと想像した。終演後ようやくリャンさんと言葉を交わすことが出来た。

「リャンさん！音楽に『相声』を盛り込むってほんとうですか？」と筆者。すると「ほんとうです。」とリャンさん。筆者が続けて尋ねた。「どの芸人の語る『相声』を使うつもりですか？」

「侯宝林（ホウパオリン）です」とリャンさんが答えた。リャンさんは続けて「どんな具合になるか戸張さん（筆者）が帰国する前に必ずお聞かせします！」と約束してくれた。この日はこれで別れた。どうやら本気で「相声」を現代音楽の中に取り入れようと考えているらしい。それにしても中国には故人も含めれば「相声」芸人の数は多い。そのなかから侯宝林を選んだのはさすがである。眼の付けどころがいい。

リャンさん（右）と筆者の長女；バブルネック　涼（左）。大学の研究室で。

国宝級の相声芸人侯宝林

侯宝林を紹介する前に「相声」についていささか語っておこう。

「相声」はわが国の落語、漫談、漫才、コントなどを混ぜ合わせたような中国の伝統話芸である。演者の数によって三種類に分かれる。一人だと「単口（タンコウ）相声」、二人だと「対口（トゥイコウ）相声」、三人かそれ以上だと「群口（チュンコウ）相声」という。いずれも芸人が舞台に立ったままで語る。見た目でいうと「単口」は漫談や立って語るところが違うが落語、「対口」は漫才、「群口」はコントにそれぞれ似ている。

「相声」は清朝末期、咸豊帝在位の時期（1850～61）北京、天津など中国東北地方で発達し、広まった。今からざっと百六十年前のことである。そして 1949 年の中華人民共和国成立以前に作られたり、流布されていたものを「伝統相声」、1949 年以後に作られたものはすべて「新作相声」とよばれている。

侯宝林（1917～1993 年）は現代中国を代表する国民的相声芸人。国宝とよばれた。毛沢東が侯宝林のファンだったことはよく知られている。亡くなってからすでに四半世紀近く経つのに今でも録音テープや CD で多くの人たちを笑わせている。折り目正しい正確な北京語を話す、言葉にうるさい芸人だった。

「相声はなんといっても芸術であるから、芸術的な言葉を使う。相声は地元・北京の言葉で演じるが、普通の北京住民が日常使う北京の方言とは異なる。芸術的に手を加えてあるのだ。相声の北京語は簡潔で、洗練され、わかりやすくなければならない。」ある「相声」のまくらでこんなことをいっている。

得意な芸は物真似だった。物真似といっても動物の鳴き声や有名人の声色をまねるのではない。京劇や昆曲など伝統演劇の歌、セリフ、しぐさ、露天商の口上、物売りの売り声、それに方言などを真似るのである。なかでも伝統劇の物真似は他の追随を許さなかった。「相声」芸人になる前二年半師匠について京劇の修行をしたからである。侯のこの芸を楽しむには『戯劇与方言（シィチュイユィファンイェン）（伝統劇と方言）』や『戯劇雑談（シィチュイツァタン）（京劇漫談）』あたりを勧めたい。

大学の研究室で新曲について話すリャンさん。

侯宝林の声が“規則正しい雑音”に変わる

侯宝林の演目の中からリャンさんが選んだのは『売布頭（マイブットウ）（布売り）』と『離婚前奏曲』の二つだった。前者は侯が得意の行商や露天商の売り声や口上を聞かせ、後者はまだ独身とウソをついて愛人と交際する中年幹部の失敗談。侯の愛人振りが終始笑いをさそう。もっとも「相声」の内容などはどうでもいいような気がしないでもない。というのはリャンさんは「相声」を音楽の中に組み込むというのだ。とすると中国の「相声」を「相声」として、つまり笑いの伝統話芸として内容まで必要とするのかどうか？しかし「相声」を音として取り込むとはどういうことなのか？侯宝林の声や正確な北京語などを音、音声として使うということなのであろうか？そこのところがわからないのである。リャンさんが目下作曲しているのがコンピューターと電気工学の知識を駆使して作るハイテク音楽、電子音楽といわれるものだとは、筆者はその時全く想像していなかったのである。

筆者が帰国する日の前日、音楽になった「相声」を聞かせてもらった。指定された大学の研究室に赴いた。リャンさん個人の研究室ではなくて、天井の高い大きなホールであった。テレビ局の録音スタジオのようなホールである。その一角にコンピューターや録音スタジオでよく見かける、音楽を調整するためのテーブル状の大きな装置がホールの一隅に、ホールを区切るような具合に置かれている。リャンさんはこの部屋で作曲をするらしいが、音楽を連想させるようなものは何もなく、殺風景なホールだった。向こうで別のグループがなにか組み立てている。筆者には娘と女房が同行していた。リャンさんの友人で詩人の葉維廉（イエウェイリエン）さんもやってきた。所定の場所にわれわれを坐らせるとリャンさんが「始めます！」と声をかけた。

スピーカーがどこかにあるらしく、ザワザワという低い雑音、規則正しい雑音が聞こえる。無数の小さな黒い破片が大きく広げた紙の上を滑り落ちていく。眼を閉じて聞いていると、そんなイメージが浮かぶ。「相声」はいつ始まるのか首をかしげていたら、これが音になった「相声」であった。野太い人間のヨウという声が何の脈絡もなく、間隔をおいて二回聞こえた。ヨウとは中国語で「有」という文字の音と同じだった。それからまた規則正しい雑音に戻って終わった。「およそ三分です。」とリャンさんがいった。

同研究室で（左から）リャンさん、筆者、葉維廉さん。

進化する現代音楽が分からず違和感抱く？

筆者の予想と全く異なる音だった。『売布頭』も、『離婚前奏曲』も細かい音の要素に分解され、雑音としか聞こえなかった。コンピューターで作った音なのであろう。ショックで声も出なかった。侯の見事な北京語もこれでは形無しである。二つの「相声」は合わせて約三十分であるのに十分の一に短縮されてしまった。だが何もいえなかった。こんな感想はいまはいうべきではないという気持ちもないわけではなかったが、あまりの結果にやはり呆気にとられていたのである。

リャンさんも気がついた様子で口を開いた。「侯宝林を選んだのは、侯の音域が広いからです。たとえば郭徳鋼（クオトォカン）（いま中国で売れっ子の「相声」芸人）は音域が狭くて使えません。」

リャンさんが侯を選んだのは、北京語が正確だからとか、「相声」が面白いからだという筆者が想像していた理由ではなかったのだ。これもショックだった。筆者が気を取り直して尋ねた。「これでは『相声』かどうか判別がつきませんね？」「想像もつかないでしょう。」とリャンさん。「『相声』が破壊された？」と筆者が言うと、「そういえるかも？」と応え、さらにいま取り組んでいる作品について説明してくれた。

それによるとこの作品は三つの楽章で構成される電子音楽の組曲。タイトルは『聴景（Hearing Landscapes）』。各楽章の標題は「高山」、「郷音」、「水雲」、合計 19 分 43 秒の作品だ。第二楽章に「相声」を使うのである。中国の近代山水画家黄賓虹（ホアンビンホン）（1865～1955 年）の絵画の中の音を聴くというテーマ。この画家は 1953 年 88 歳前後に白内障のため両眼を失明した。だが失明してからの作品は中国伝統絵画の最高峰と言われる傑作だった。心中の山水を画面に映しだしたのである。その時期の黄の作品のなかの音を作品にするのだという。

帰国後あのときのことを振り返ってみるに、言葉より細かい音になった「相声」を聞いた時の筆者の驚きとショックは多少体裁をつくろっていえば、「人が新しいテクノロジーに触れたときに起こる違和感」（『音楽未来形――デジタル時代の音楽文化のゆくえ』）に起因するものだったと説明できるような気がする。だが筆者としては自分の古い音楽概念や科学技術とともに発展進化する現代音楽に対する無知をさらけ出し、醜態を演じてしまったことを恥じ入るばかりである。

＊　増田聡・谷口文和『音楽未来形――デジタル時代の音楽文化のゆくえ』（東京・洋泉社、2005 年 3 月、74 頁）。

ニューヨークで出版されたリャンさんの『Bamboo Lights』。

（2016 年 3 月 23 日）